大乘止観法門における「本覚」・「不覚」の概念

菅野 藤史

中国における「本覚」用例は、『北京失訳人名』とされる『金剛三昧経』（大正蔵273番）に出るが、この経は唐代以前の仏教文献が『大乗起信論』に異論がないはずである。したがって、中国における「本覚」の概念を理解するためには、時間的に初期の例として『大乗起信論』の成立後、あまり時間を隔てない頃に、『大乗起信論』の影響を受けた成立した『大乗起信論』の考察は重要である。それに比べると、『大乗起信論』における「本覚」は、『本覚』の概念の説示が必ずしも体系的ではない。したがって、本稿の意義は限定されたものとなるべきでないが、中国仏教史に
大乗止観法門は、「大乗起信論」に於ける「本覚」に関する最も重要な記述を引用している。また、故論云、阿梨耶識有二分、一者覚、二者不覚、依不覚故、而実不覚、能知识義、為説本覚。故得始覚、即同本覚。如実不有始覚之生一切法、云何為一、一者覺義、二者不覺義。所言演義者、謂心體離念、離念相者、等虛空界、無所不遍、法界一相、即如来平等法身。依此法身、說名本覚。何以故、本覚義者、對始覺義說、此識有二種義。能撰一切法、而有不覚、依不覺故、説有始覚。如次有始覚之義（大正33卷8-8）

大乗起信論の「阿梨耶識有二分、一者覚、二者不覚」（大正33卷8-8）に於て、不覚即は無明、此二和合、說為本識、故道浄心時、更無別有阿梨耶、道阿梨耶、更無別有浄心。但以本體別義、有此「名之異」（大正33卷8-8）と解説されている。覚、浄心、不覚、無明として、
この覚と不覚が和合して本覚、阿梨耶識と説かれるところ、浄心のほかに阿梨耶識はなく、阿梨耶識のほかに浄心はない。若し、浄心の体は和合して本覚、六七等識是用（

|

)|
|---|

）も参照すべきであるので、二名の相違があることを説明している。真心是体、本

浄心の用を覚と規定したものであろう。

淨心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したものであろう。

浄心の用を覚と規定したも
項目の「明何所依止」においては、「心」に仏観の修行することを明かしている。この「心」とは何であろうか。この項目は、「出衆名」、『教義』、『解体状』の三つの部分に分かれており、「大乗観法門」は、「出衆名」において、「教義」として示されている。

在り、この「心」を「出罪」において、その一にについて簡潔な説明を加えている。「大乗観法門」の本覚・不覚に関する議論は、仏性に直接の関係について説かっている。ただ、そうは言っても、後に述べるように、心の体と用を分ける視点に立つと、本覚は用に相当する概念であると言える。
二
大乗止観法門における「本覚・不覚」の用例とその分析

（1）仏性の意味は覚心であり、浄心の体は不覚ではないこと

まず、「大乗止観法門」は、止観の依止とされた心が仏性と名づけられる理由を説明するなかで、仏性を仏と性との二
つに分け、仏名為覚、性名為心。以此心名之体非是不覚故、說為覚心也。（252）

と解釈している。つまり、「仏」は覚、「性」は心の意味であるから、仏性は「覚心」と言え換えられ、その浄心の体は不覚でないので、覚心仏性と
規定されると述べている。さらに、浄心は「真相」と言え換えられ、その真相が不覚でないとされる理由が問われる。答
えとして、二つの理由が示される。不覚即是無明住地。若此浄心是無明故、衆生成仏、無明滅時、応無真心。何以故、
以心是無明故。既は無明自滅、浄心自在。故知浄心非是不覚。（252）

と示される。不覚即是無明住地。若此浄心是無明故、衆生成仏、無明滅時、応無真心。何以故、以心是無明故。既は無明自滅、
浄心自在。故知浄心非是不覚。（252）

又復不覚滅、故方証浄心。將知心非不覚也。（252）

及び示される。不覚即是無明住地。若此浄心是無明故、衆生成仏、無明滅時、応無真心。何以故、以心是無明故。既は無明自滅、
浄心自在。故知浄心非是不覚。（252）

と示される。不覚即是無明住地。若此浄心是無明故、衆生成仏、無明滅時、応無真心。何以故、以心是無明故。既は無明自滅、
浄心自在。故知浄心非是不覚。（252）

又復不覚滅、故方証浄心。將知心非不覚也。（252）

と示される。不覚即是無明住地。若此浄心是無明故、衆生成仏、無明滅時、応無真心。何以故、以心是無明故。既は無明自滅、
浄心自在。故知浄心非是不覚。（252）
心体平等と本覚

次に、「別に、何不以体是覚、名之為覚。而以非不覚故、曰為覚耶」（924.5.14）という問題を取りあげられている。ここには覚不覚の関係が提起されているので、「大乘止観法門」は、心体平等、非覚非不覚（924.5.14）と述べ、心覚性を異同同異之義、云何同、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚とはなされる。準同異之義を理解する立場でかつ覚を明かすことを述べている。「大乘止観法門」には直

これによれば、心体には、無師智、自然智、無師智の三種の大智の三種の大智を備えている。この心体に三智性を備えているので、心体覚や、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚、謂心体平等即是覚とはなされる。準同異之義を理解する立場でかつ覚を明かすことを述べている。「大乘止観法門」には直
『大乗止観法門』における「本覚」・「不覚」の概念

は、本覚は、凡夫（在障）においては仏性、三種の智性と名づけられ、出障・煩悩から解脱した仏に、においては智慧仏と名づけられ、このように在障と出障の明確な相違、立て分けることが必要である。従って、心体の平等の概念が体に相当する概念を名付け、体においては、凡聖無二で、ただ如仏（真如仏と見立てたもの）で、煩悩を破壊して、仏の道の構造について、次のような論を展開している。先に述べたように、心体は覚と不覚の相互関係を越えるので、凡夫の思いの構造について、次のような論を展開している。関目、智慧仏、為能覚浄心故仏、為浄心自覚故仏、為仏、答曰、具足二義。一者覚に浄心、二者浄心自覚。雖言二義、体無別也。此義何云、謂一切諸仏本在凡時、心依薰熏、不覺自動、顯現虚状。虚状者、即は凡夫五陰、及以六塵、亦名似識似色似塵也。似識者、即六七識也。由此似識念念起時、即不了知似色也、但是心作、虚相無実。以不離相薰故。若無似識、即果時無明。若無明、即無妄想。若妄想、即不成妄境。是故四種諸仏念時、合。方能現於虚状之果。何以故。以不相離故。

すべての諸仏は凡夫のとき、「心依熏熏、不覚自動、顕現虚状」（682-62）という迷いの事態が生ずる。心（自性清净心
不覚故動、顯現虚状也。如是果子相生、無始流転、名為衆生。

不覚故動、顯現虚状也。如是果子相生、無始流転、名為衆生。
不覚滅故、訛心為覚、亦無所妨也。（62828）
あるように、心体は覚・不覚その他の相対概念を越えているが、不覚
心の覚を説いても差し支えないことを述べている。そして、「此就対治出障心体、以論於覚、不況用為覚」

【大乗止観法門】における「本覚」・「不覚」の概念

減するので、心の覚を説いても差し支えないことを述べている。そして、「此就対治出障心体、以論於覚、不況用為覚」

【大乗止観法門】における「本覚」・「不覚」の概念
心体と用としての覚の関係の問題をめぐって、いくつかの問答が展開する。第一の問答については、

問曰、若就心体本無覚、名為覚者、凡夫即仏。何用修道為。答曰、若就心体平等、即無修与不修成与不成、亦無覚与

不覚。但為明如仏故、擬對說為覚也。又復若提心体平等、亦無覚平等諸仏与此心体有異。故心性結界、心体及衆生、是

三無差別。然復心性結界法界法門、法尔不壞。故常平等、常差別、常平等故、心仏及衆生、是三無差別。常差別故、

流転五道、說名衆生。反流法界、說名為仏。以有此平等義故、無仏無衆生。為此緣起差別義故、衆生須修道。
『大乗止観法門』における「本覚」・「不覚」の概念

すすれば不覚がなく、また見証しなければ覚と名づけない。これは仏と凡夫の実際の体験を根拠とした答えである。

第三の問答については、

問曰、聖人滅不覚、故得自証等心。若無不覚、云何言滅。又若無不覚、即無牦生。答曰、前已具証。心体平等、無凡無聖、故說本無不覚。無心性緣起、故有滅有証、有凡有聖。但証以順用入体、即無不覺。故得証知心体本無不覚。但凡是進用、一体謂異。

第四の問答については、

問曰、心顯成智者、為無明盡、故自然成智。為更別有因緣。答曰、此心在染時、本具福智二種之性、不少一法、与倶無異。但為無明染法所覆、故不得顯用。後得福智、一種染業所熏、故不得顯用。有照空無所熏、但智自性真心性照之能、智用由熏成也。
すことができない。福と智の二種の浄業に黙示されて、染法が尽きると、二種の性が顕現し、相好、依報、一切智などの

事用を成立させる。智の体は真心が備える本性として照らす能力である、智の実際の用は浄法の熏習によって成立す

る。

第五の問答については、
問曰、心領成智、即以心為仏性。心起不覺、亦應以心為無明性。答曰、若就法性之義論之、亦得為無明性也。是故經

「如來依藏不覚」次に、「明何所依止」の第三の「辨体状」は、
心（真心）の本質、相相を明かすのであるが、「如來依藏以辨真如」の三つの部分に分かれている。「不覺」をめぐる議論は、
不一不異以論法性、「舉二種如來藏以辨真如」の三つの部分に分かれている。「不覺」をめぐる議論は、
不一不異以論法性。「如來依藏以辨真如」のなかの如來依藏を明かす部分に見られる。ここでは、「心体は空なるのである、
という表現が可能である。そこに付されている問答において、「不覚」が取りあげられている。

まず、

問曰、果時無明与妄想為一為異。子時無明与業識為一為異。答曰、不一不異。何以故。以澄心不覺故動、
不覚即不動。又復若無無明、即無業識。又復動与不覚和合俱起、不可分別。故子時無明与業識不異也。又不覺自是迷闇之義、
過去果時無明所熏起故，即以彼果時無明為因也。（⑥⑦⑧⑨）

と説かれている。果時無明と妄想との同異関係、子時無明と業識との同異関係が問われる。それにに対して、いずれも一不異の関係であると答えられる。その理由として、子時無明と業識との不異については、法心が不覚（子時無明）であるから、動は不覚を区別できない。それゆえ、子時無明は業識と不異である。また、動は不覚が果となる。果時無明と妄想との不異関係については、果時無明と妄想との不異関係である。（⑩）

果時無明と妄想との不一不異の関係については、果時無明と妄想との不一不異の関係である。（⑪）

果時無明と妄想との不一不異の関係については、果時無明と妄想との不一不異の関係である。（⑫）
三

小結

大乗止観法門における「本覚」、「不覚」の重要な用例を取りあげ、考察を加えた。

1. 不覚は、本覚に不純なものを支えているが、不覚の体である。不純な部分をとらえる観念が生じる。

2. 本覚は、仏性の体であり、仏性の諸相を対照的である。不純な部分が共有されている。

3. 本来の佛性は、不純なものではない。不純な部分を対照的である。

4. 佛性と寂靜心は、佛性の体である。不純な部分を対照的である。
5 心体は平等で覚と不覚の相対関係を越えているが、心用として無師智・自然智・無礙智の三智の性を備えているので、

6 自性清浄心が現実（果時無明・妄想・妄境・似識の四つの現実）を受けて、不覚（果時無明）が自ら動き出していく、「虚状」

7 果時無明・妄想・妄境・似識が心に現実して、それぞれ不覚（果時無明）・業識・似識の種子、似識の種子をそれぞれ

8 体は平等で、覚と不覚の相対関係を越えている。

9 虚状の種子（似胞の種子と似識の種子）は子時無明に依存して生ずる。子時無明と果時無明は互いに他を生ずる循環を

形成し、迷いの衆生の立場を成立させている。

10 心体と名づけることができる。

11 不覚が滅する、あるいは本覚であると述べられるが、他方、それぞれ互いに因果となるとも述べられている。

12 果時無明と妄想とは不一不異であり、子時無明と業識とは不一不異である。また、子時無明が因で、果時無明が果、

業識が因、妄想が果であると述べられるが、他方、それぞれ互いに因果となるとも述べられている。

注

【大果止観法門】を挙げ多くの論文において、本覚・不覚を中心的に扱う論文が少ない理由がここにある。ただし、

松田未央

【大果止観法門】の研究 ②585頁、⑤586頁は、このテーマを扱っている。
付記 本稿は、一〇〇四年十一月六・七日、中国人民大学で開催された「第一回中日仏学講会」（中国人民大学仏教与宗教学理論研究所）に掲載される予定である。なお、本稿は、平成十六年度の（創価大学教授 中国人民大学仏教与宗教学理論研究所教授 藤原教授）の一部である。